

江戸時代の彗星

金澤 花陽乃

4 月といえば、天文好きな人にとっては「4 月こと座流星群」が毎年見られることで有名な月ですね。そこで今回は、江戸時代に書かれた日記から天文、特に彗星に関わる記事をご紹介します。

小瀬戸村の須田精堂という人が書いた「須田家日記」には、日記が始まる天保 14(1843)年から江戸時代が終わる慶応 4(1868)年までの間に、以下の 3 件が記されています。

①天保 14(1843)年 2 月 17 日

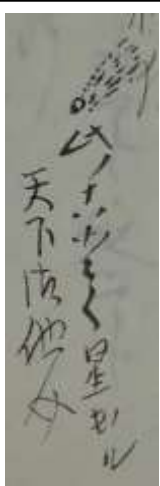
「未申ニ當リ天ニ永ク刀如ク雲出西ノ方ニ入、柴(ママ、「此」カ)ハ星ナリ」

②安政 5(1858)年 8 月 24 日

「西ノ方ニ(図)此ノことく星出ル」

③万延 2(1861)年 5 月 28 日

「戌ノ方上天江(図)此ことく二星出ル」



②の図と文字



③の図と文字

①は、この年の 2 月から 4 月にかけて世界中で観測された「1843 年の大彗星(C/1843 D1)」を指していると思われます。この彗星は少なくとも 1 億 5 千万 km 以上ある大変長い尾を持ち、地上からは空に 50° 以上にわたってのびているのが見えたといえます。そのため、上記のように尾を「雲」と称した記録が各地に残っています。

②は、19 世紀に観測された彗星の中で最も輝かしいとされているドナチ彗星(C/1858 L1)と考えられます。この彗星は、世界で初めて写真に撮られた彗星としても有名です。

③は、非常に明るかったといわれているテバット彗星(C/1861 J1)のことだと思われます。その明るさは 1 等星から -2 等星ともされ、昼間でも容易に見えるほどであったようです。

3 件のうち、②と③には図が描かれています。尾の向きが違うのはもちろんのこと、尾の形状も良く見ると描き分けてあるのがわかります。また、記述の中で注目したいのが②のすぐ横に書かれた「天下御他介」の文字です。ここでいう「天下」とは江戸幕府の将軍を指しますが、この年の 7 月に第 13 代将軍徳川家定が死去しています。彗星は古くから凶兆とされてきたため、精堂も将軍の死去と彗星の出現を結び付けて考えたのかもしれませんが、これらの記事はいずれも短いものですが、江戸時代の人の彗星観が垣間見えるような気がします。